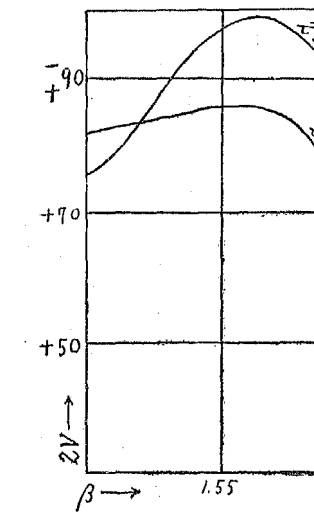
基から成り石基は輝石の小結晶、少量の鐵鑛、柝狀の長石微晶から成り長石の一部分は他結晶の間隙を充す長石様鑛物に移り變つてゐる。

長石は極く僅かに斑晶を成すものがありその成分は 72An であり、石基中の明かな結晶をしたものは $\beta=1.555-1.550$, $(+)2V=85°$ で基性アンデジンである。然るに更に酸性の長石は大部分 $\beta=1.545\pm0.002$, $(+)2V=84°\pm4°$ なる性質を有し β が 1.540 以下なる粒については光軸角が +10° から +65° までのものが觀察される。即ち此等特殊の長石に

第一圖



於ては屈折率と光軸角との關係が斜長石系列に於けるものと全く異る。總ての加里長石と霞石とは光學性が負で混同される事がないから此等長石様の鑛物はアネムーサイト系列に屬するものと考へられる。太平洋岩中のアネムーサイトと斜長石に於ける屈折率と光軸角との關係を圖示すると上の様である。(春本)

新著紹介

○ラツチエル海洋論　市川誠一譯、四六版一四八頁、古今書院發行　三月　一圓二〇錢

本書は人文地理學者ラツツエルの國民勢力の源泉としての海、政治地理學的研究の第二版（一九一一年版）を譯したものである。海洋を制扼することが如何に民族の發展に資することであるかは吾人日本人の親しく自らを顧みて頷く所である。海洋の人文學的意義、其の肢節の意義、海上支配の要約は本書に於て歴史を顧みながら躍如として論述されて居る。人文地理學の讀物として決してラツツエルのものは古いとして捨つべきものでないのは明かである。唯本書の譯述は生硬であつてかなりわかり悪い。語句の濫譯の例をあげると「高度の階段に於ける羅針盤」だとか「優秀な海岸組織及び島嶼の發達」などで從つて意味の徹底しない所が多い。慶應大學教授校閲とある以上本譯は眞面目な改譯が讀書界から要求されるべき一つである。(N)

○**日本地形概說**　近畿中國篇　第三卷　工藤暢須著
昭和五年三月　中興館發行　定價二圓九十錢

近刊の日本地理書である、總論の外に各府縣別に詳解を試みたもの、菊版三七〇頁、地形圖に縮尺が入つてゐない（F）

○**世界の地質構造**　三村信男著　昭和五年三月
大同館發行　定價五圓八十錢

著者はこの春期休暇に大和アルプスを遠征し、氣候の激變に會し、あはれ有爲の志を抱いて長逝した。同行の生徒の中にも、不幸に會したものがある。悲痛止む能はざるの時、予はこの新著を手にして徒らに人生の測りがたきを哭するのみである。近畿の中等教育界は、さきに大阪の山極氏を失ひ、今は三村氏を失ふ、本學園も亦これら好學の君子を失ふて寂寥の情に堪えない、本書はかくて三村氏の絶筆となつた菊版五四八頁、サラサラと世界地質を書き流したものであるが、それにしても授業の餘暇にこの才筆を揮はれたことを敬服し敢てこの書を同好の士に推薦し一は以て故人の靈を慰めたい（藤田）

雜報

○**長崎縣七釜鍾乳洞**　七釜鍾乳洞は西彼杵郡七釜村中浦北郷字戸五郎に屬し、中浦郷の北端から南西五町の丘陵に在り。全長四町三十五間、入口は北面し高さ六尺、幅五尺あり、入口より八米までは平坦にして高さ約四尺立ちて行くべきも是より先は匍匐して漸く通ず。屈曲甚だしく洞口より五十五米にして一瀑布あり、清水瀧といひ高さ十米、階段狀の崖上を落下し奇觀を極む。瀧を上れば更に道開け洞口より二百七米にして八疊敷位の廣間に入る。此處は白宮殿と呼ばれ高さ約二間、天井及兩壁は鍾乳石を以て蔽はれ恰も白玉の殿堂たる觀あり。更に進めば大小長短の鍾乳石及石筍簇生し甚だ變化に富む。再び入口より四百二十一米にして一瀑布あり、靈泉瀧又は奥の瀧と名付く、五層をなせる岩上を流下す。之より先は溪流に沿ひ行路困難なり。本洞は從來清水瀧まで探勝されたれどもその奥を究めたるものなかりしが、昭和三年八月洞口より五百米の地點まで探究されたるものなり。（長崎縣史蹟名勝天然記念物第六輯による）

○**世界に於ける動力使用の現況**　石炭は現今に於ける最も重要なる動力であるが、漸次に石油と水力とが增加しつゝあることは注意すべく、ことに、船舶に於ては石油其他に於ては水力と石油の使用が擡頭して來つゝあるのが世界の趨勢である。

動力の種類と其の使用百分率

種類	一九一三年	一九二五年
石炭	九〇、〇九%	七七、一五%